

## 小林一三記念館についての一考察

塩田昌弘

### 要旨

近代日本の創業者といわれる小林一三は、阪急電鉄、阪急百貨店、東宝映画、宝塚歌劇等の設立企業家として高名である。また、現在の逸翁美術館のコレクションは小林一三の優れた審美眼により選定され収集されたものであり、その事は美術館の進むべき方針を決定したといえる。小林一三の逝去後、その邸宅を逸翁美術館として美術館活動が開始された。その後、開館50周年を記念して平成21年(2009)10月に新美術館を建設し開館している。これが、現在の逸翁美術館(池田市栄本町12-27)である。旧逸翁美術館は、小林一三の旧邸「雅俗山荘」当時の状態に復元し、平成22年(2010)4月に小林一三記念館(池田市建石町7-17)として活動を開始している。本稿は、現在の逸翁美術館の原点である小林一三記念館の成立の由来と現状を図面、写真、文献等により明らかにしようとするものである。

キーワード：小林一三、小林一三記念館、雅俗山荘、財団法人阪急文化財団

〔目次〕

はじめに

I. 小林一三記念館の成立の歩み

～逸翁美術館から小林一三記念館へ～

II. 雅俗山荘について

III. 小林一三の足跡

～その人となりを知るために～

おわりに

図版

注と参考文献

## はじめに

小林一三の旧邸を「雅俗山荘」と呼ぶ。実業家であり、且つ、芸術・文化に深く傾注した小林一三は、芸術と生活との一致を目的とした。そして、自宅を雅俗山荘と呼び、同士と共に、美術工芸品を楽しみ、研究会や講演会を催し、人生と芸術との一致をめざした。『雅俗三昧<sup>1)</sup>』は、その記念の著書といえよう。戦争の影響で、そういった活動を休まざるをえなくなりこの一書を発行したのである。「自序」にいう。「雅俗山荘が、再び我々の手に歸る時は、恐らく私は幽明其境を異にして、私の靈魂は、群立つ松が枝の上を飛んで嬉々として集ふ我同人の健康を祝する時、古歌に名高き『皐月山卯の花月夜ほとゝぎすきけどもあかず又あかんかも』その血に啼く杜鵑の空を、誰か見上げるであろうか。』<sup>2)</sup>と。

小林一三の精神は、この雅俗一致、雅俗融合の境地をさらに超越しようとした点にある。前人未到の境地である。小林一三記念館を様々な角度から考察し、小林一三の雅俗とは何かを明らかにしたい。

## I. 小林一三記念館の成立の歩み

～逸翁美術館から小林一三記念館へ～

小林一三記念館はどのようにして生成されたのか。この事について、逸翁美術館理事長の小林公平氏が次の様<sup>3)</sup>に述べている。

逸翁・小林一三は生前から自ら蒐集した美術品を展示するために、小美術館の設立を計画いたしておりました。ところが、逸翁が急逝されたため、関係者一同相寄り、その遺志を引き

## 小林一三記念館についての一考察

継ぎ、居宅でありました雅俗山荘において開館いたしました。

昭和32年（1957）1月25日、池田市の自邸「雅俗山荘」で急逝した小林一三の遺志を引き継ぎ、この建物を逸翁美術館として開館したのである。『逸翁美術館50年の歩み』（財団法人逸翁美術館発行出版物）の「展示活動の記録」<sup>4)</sup>によれば、下記の展覧会が美術館の初期の頃に開催されていた事が理解できる。

### 開館特別展（総合美術）

会 期：1957年10月4日～12月10日

展示点数：58点

入館者数：3440人（入館料：大人50円 小人30円）

### 春季第1展（総合）

会 期：1958年3月1日～3月31日

展示点数：72点

入館者数：954人（入館料：大人50円 小人30円）

### 春季第2展（桜）

会 期：1958年4月1日～4月30日

展示点数：66点

入館者数：1237人（入館料：大人50円 小人30円）

### 春季第3展（菖蒲・節句—逸翁1周忌追慕遺作遺墨展—）

会 期：1958年5月1日～5月31日

展示点数：60点〔31点〕

入館者数：1313人（入館料：大人50円 小人30円）

また、近年の2007年には、開館50周年をむかえたため、下記の展覧会を開催した。<sup>5)</sup>

### 開館50周年特別記念展（秋季展）

会 期：（前期）2007年9月15日～10月21日

（後期）2007年10月27日～12月9日

展示点数：143点 他に池田文庫より4点

入館者数：9241人（入館料：一般700円 大・高生500円 中・小生200円）

講演：10月6日「桃源郷の詩と絵画—陶淵明から鐵齋・芋錢まで—」

京都造形芸術大学名誉学長 芳賀徹氏

11月10日「逸翁（小林一三）の愛した美術品」

国文学研究資料館長 伊井春樹氏

蕪村・呉春展（早春展）

会期：2008年1月12日～3月2日

展示点数：59点

講演：2月9日「蕪村の芸術—詞・書・画の融合—」

岡田彰子館長

この様に展覧会活動をして、半世紀におよび地域社会に良質の文化を発信しつづけた逸翁美術館は、開館50周年を期に近くの地に美術館を新築し、2009年10月、新逸翁美術館として再スタートしたのである。<sup>6)</sup>

一方、それまでの逸翁美術館、即ち、旧逸翁美術館はどうなったのか。小林一三記念館として小林一三の様々な資料を展示・公開している。その問いに関しては、下記の文が詳しい。<sup>7)</sup>

50年余り開館していた「逸翁美術館」が新館へ移転したのを機に、展示場及び収蔵庫として使用していた小林一三の旧邸「雅俗山荘」を居住当時の状態に復元し、装いを新たに平成22（2010）年4月に開館しました。展示施設は、「雅俗山荘」と「白梅館」（別館）から成り、「雅俗山荘」は、長屋門（正門）、外壁、茶室（「費隠」、「即庵」）と共に国登録有形文化財に認定されています。その佇まいは一三を偲ぶに最もよい記念物といえるでしょう。また邸内に設けられた展示室では、一三の生い立ちや、収集家また茶人「逸翁」（一三の雅号）などに関する資料を展示しています。「白梅館」では、一三が興した、もしくは関わった事業等を展示パネル、資料、映像、ジオラマにより紹介しています。また、「シアタールーム」に於いて、ハイビジョン映像により、畢生の起業家・小林一三が歩んだ道を紹介しています。

新しい逸翁美術館が成立移転したので、従来あった逸翁美術館の建物を小林一三記念館として平成22年（2010）4月に開館したことが理解できる。<sup>8)</sup>

## Ⅱ. 雅俗山荘について

小林一三記念館は、小林一三の旧邸「雅俗山荘」を居住当時の状態に復元し、平成22年（2010）4月に開館した。国登録有形文化財に指定されている。設計は竹中工務店の小林利助で、昭和11年（1936）9月にはほぼ完成し、一三と御家族は入居している。最終的に竣工したのは昭和12年（1937）1月であった。<sup>9)</sup>

雅俗山荘の雅俗とは何か。これは小林一三のメッセージを含有していると考えられる。雅俗について日本語大辞典によれば、「雅やかなことと、俗っぽいこと。雅と俗。culture and vulgarity」と説明されている。小林一三の思考回路には、この雅と俗の二つの世界をおだやかに行きつもどりつ進んで行くかの如き自在性が認められる。緩急自在な精神を背景に、雅と俗の相反する境涯を知り、鮮やかに理想世界へ向かわれる。小林一三は経済界、実業界の起業家として大成功したが、一方、美術、文芸、演劇に精通した慧眼の人でもあった。厳しい経済界に生きながらも、温かい家庭生活を維持し大切にされた小林一三は、その住居を雅俗山荘と呼称した。小林一三の「俗」の中には「稚気」があり、ここに小林一三の優しさ、和の精神を感得することができよう。例えば、小林一三の俳句等を例に引く。

<sup>10)</sup>  
甲

咲いてまだ 日のなき雨の 桜哉  
花一樹 御宴のあとの 公卿屋敷  
菜の花の 白さよおぼろ おぼろ月

<sup>11)</sup>  
乙

外套を すりに取られて 夜寒哉  
秋の旅 呉越の客の いびき哉  
小便も 刀の如し 冬の月  
なまくら武士が 水鳥の音

小林一三は茶道にも造詣が深かった。人は彼の茶道を大乘茶道と呼んだ。その意味は、身分の上下なく、誰もが一同に茶会に参加し、茶を喫することが出来る工夫をした為であった。小林一三は利休の茶道について次の様に述べている。<sup>12)</sup>

「見渡せは花も紅葉もなかりけり浦の苦屋の秋の夕暮」と、うるさい程<sup>13)</sup>の講釈はきかされてゐるが、実は珠光も紹鷗も利休も、口頭では佗の心持を説き、爾来お茶人は所謂和敬清寂一本槍で進んでゐるが、いざ実行となる却々むづかしい。立派な生活をして名利を捨てず、物質慾は充分にある、そして風雅を説き芸術的環境を好愛する。さうにいふ人間の慾望を満足せしむる一つの機関がお茶道であるから斯くまで発達し隆盛になったものであることを忘

れては駄目である。

以上の文意から、小林一三の厳しい透徹した人間通の感性が歴史上の人物、茶道文化、宗教観、政治家等を批判している事がうかがわれる。

雅俗山荘での普段着の小林一三を描写した記録がある。その当時、逸翁美術館副館長であった加藤義一郎の「お手紙に偲ぶ」に雅俗山荘内の室内の描写や小林一三の美術品に対する接し方等が精細に記録されている。本論考文の雅俗山荘内部写真（建築）の説明にもなっている<sup>14)</sup>ので下記に紹介したい。

筆まめで驚かれるのは、毎日丹念に書いていられた日誌の感想であるが、（この日誌については一度、「自分で印刷して人に見てもらうのも自慢たらしく、キザっぽくてイヤだが、死んでから三周忌ぐらいに印刷して友達にくばってもらうんだナ」と洩らされたのを承って、私はメモしている。二十一年九月一日、その頃私はよくいつか、その日誌の感想の中からある部分を写し出して『戦争常識論』などの原稿を書かされていたので、自然こんなことも承ったのだらうと思う）、それよりも蒐蔵の美術品に、一つとして洩れなく、一々箱に書き、紙に書いて貼りつけ、また必要に応じてはいろいろの心覚えを書いて箱に入れてられるその丹念さには全く、何度見てもそのたびに驚嘆をくりかえすのほかはないのである。これは先生が、いかに美術品の一つ一つに深い愛着を持っていられたかの証拠を示すものである。

はじめにも述べたように、先生は昭和二十一年まで（雅俗山荘にはいられてから十年間も）蔵帳を持たれなかった。しかも道具—美術専門の扱い人もおかれなかった。普通、道具家と呼ばれる蒐集家には例外なく専門の道具方があって、出し入れを扱い、蔵帳（美術品の戸籍）を作って明細を記入し、付け札をつけ、蔵票を貼る仕事を怠りなくすることになっている。蔵帳には彩色入りの絵図を描き入れたり、写真を貼りつけたカード式に整理されているところもある。

先生の場合、こういう世間並な、常識的な扱いは何もされなかったのである。しかし、その代りに倉庫は先生の独創的なもので、その整理収納方も独創的であった。雅俗山荘は鉄筋コンクリート造りの二階建であるが、その二階中央の大きい一室が美術品専用の倉庫に当てられていた。その床面は水平の廊下で先生の書齋、寝室につながっていた。防火扉を開くと直ぐそれが一つの広い庫室であった。窓の鉄扉を開くと外光が存分にはいった。通例の土蔵式の倉とは、雲泥の快適さで、これなれば何時間でも倉の中で遊べたに違いなかった。忙しい日常ではあったに違いないとも、その忙しさの間に楽しむことのできる設計がなされたのであった。

雅俗山荘の応接室は、一、二階吹き抜き天井の大きなもので、一方（西側）に大きな床の

間が作られ、その向い側の壁面（東側）—マントルピースの前に客椅子がゆったりと置かれていた。南面して背の高い大窓、北側一玄関からの扉に隣<sup>(ママ)</sup>って階段が昇り、上がりつめた正面の扉の中はもう倉庫であった。だから、同好の客来があつて興がのつてくると、先生の階段を上下往復される度数が繁くなった。そして書画、やきもの、なにくれとなく美術の話題に時を忘れられるのであった。

引用文中、蔵帳とは所蔵作品台帳、美術専門の扱い人とは学芸員、付け札・蔵票は作品ラベル、写真を貼りつけたカード式とは美術作品カードの事である。今日では、全国各地の文化財を展示、収集する美術館・博物館・文学館などでは学芸員の基本的な仕事となっている。この件を知るに及び、小林一三の美術品及び文化財に対する情熱がいかに純粋で強かったかを知る事ができよう。

また、文中で応接室やマントルピース及び倉庫（正式には収蔵庫という）について述べられているところがあるが、小林一三の雅俗の雅の境涯が最も強く表われた時の記録と言えよう。雅俗三昧という考え方は、この時、この場で生成されたと考えられる。

### Ⅲ. 小林一三の足跡

#### ～その人となりを知るために～

これは、『逸翁自叙伝—青春そして阪急を語る』（昭和54年7月20日初版、小林一三著）に掲載された年譜を基に、塩田が自由に小林一三の考え方、人格を形成したと思われる事項を抜粋しまとめたものである。本論考は、小林一三記念館（旧逸翁美術館即ち雅俗山荘）について考察をしているので、昭和11年（1936）9月、自邸雅俗山荘の成立までを、『逸翁自叙伝』の年譜を引用して、塩田が自由に抜粋しまとめる事にした。

#### • 明治6年（1873）出生

1月3日、山梨県北巨摩郡韮崎町（現在韮崎市）二四〇二番地に生まれ、その月日より一三と名付けられた。韮崎は甲州街道の宿駅として発展し、甲信二州の米の集散地として知られ、豪商軒を連ねる中で、小林家は布屋と称し、酒造業・絹問屋などを営み、家格並び立つものの少ない富商であった。その家系に就いては、後年、翁自ら自家の過去帳に次の如く記している。

本家相続人タル長男維清（俳人欽哉子）ハ、三十六歳ニテ一女兒ヲ遺シテ逝去、次男維賢ハ保坂家へ養子（安政六年十二月死去）、三男維明（編註、翁の祖父小平治）ハ中宿へ別家シタルガ為ニ、本家ハ末弟四男維百ニヨッテ相続サル。然ルニ別家シタル三男維明モ亦二女ヲ遺シテ死去、時ニ慶応二年七月也（同人妻ハ早く既ニ文久元年逝ク）。茲ニ於テ、

長男維清未亡人ト其兒女ヲ維明ノ家敷ニ引移ラシメ、維明ノ孤兒二女、姉きくの（編註、翁の母堂）ハ本家ニテ（妹松代ハ清水家ヘ養女）、維百夫妻ノ手ニヨッテ養ハレ、成長ノ後、丹沢家ヨリ養子ヲ迎ヘテ、姉竹代ト一三ノ二兒ヲ遺シテ明治六年八月二十二日死去、養子ハ離縁、ココニ、二代ノ孤兒本家ニ養ハル。昭和二十四年二月十一日記 逸翁

---

- 明治8年（1875）2歳  
祖父、小平治維明の立てた別家の家督を相続。

---

- 明治11年（1878）5歳  
寺子屋の名残りを留める蔵前院（寺院）の公立小学葦崎学校（第一大学区、第四十三中学区、第四十一番小学）下等小学第八級へ入学。

---

- 明治13年（1880）7歳  
公立小学葦崎学校の校舎新築成り、蔵前院より移る。普通小学第七級在学。

---

- 明治18年（1885）12歳  
12月16日、小学高等科卒業。

---

- 明治19年（1886）13歳  
東八代郡南八代村の加賀美嘉兵衛氏家塾、成器舎に入って寄宿生となり、英数国漢等、当時の最も進歩的な教育を受ける。

---

- 明治20年（1887）14歳  
夏、腸チフスにかかり、成器舎を退学。

---

- 明治21年（1888）15歳  
2月13日、慶応義塾に学ぶため初めて上京。14日、入学試験を受け即日入学。塾監益田英次氏の寄宿舎に入る。16日、入学早々、学校ストライキ起こり、3月7日、終る。同寮の者に、摂津大掾の息二見文次郎、鴻池新十郎氏らがあった。9月17日、本塾の童子寮に移り、寮誌「寮窓の灯」の主筆となる。鈴木島吉氏（興銀総裁）、磯村豊太郎氏（三井物産専務）らが同寮者中の上級生であった。

---

- 明治23年（1890）17歳  
外塾と呼ばれた崖下の寄宿舎に移る。4月4日、麻布の東洋英和女子学校校長ラージ氏殺害



事件起こる。小説家志望の熱がたかまった頃で、直ちにこの事件に材を取り、小説『練絲痕』を執筆。4月15日より25日までの間、九回にわたって「山梨日日新聞」に連載。ペンネームは靄溪（IK）学人とする。しかるに事件後、余りに短時日だったので、麻布警察署より取り調べられるなど、思わぬ結果を生じた為、遂に執筆を中止する。この頃芝居に興味を持ち、観劇を重ねて劇通となり、国民新聞より依頼され、『歌舞伎座に劇評家を見るの記』を書くも、没書となる。

---

• 明治25年（1892）19歳

12月23日、慶応義塾を卒業。25日、故郷葦崎へ帰る。

---

• 明治26年（1893）20歳

正月早々、葦崎を発し、鯉沢より富士川を下り、岩淵より汽車にて熱海に着く。当時、上毛新聞に小説『お花団子』を連載し慶応義塾の先輩で大阪毎日新聞創立に功のあった渡辺治（台水）氏と共に都新聞に入社の筈であったが、渡辺氏の毎日退社が実現せず、従ってこの話も中止となった。4月4日、三井銀行入社。十等席の資格で、駿河町角屋敷の東京本店秘書課勤務となる。月給十三円。7月、三井銀行は合名会社となる。銀行総長三井高保氏、常務理事（後、専務理事と改める）中上川彦次郎氏。9月16日、大阪支店に転勤、金庫係を命ぜられ、手代五等となる。支店長は慶応先輩で、文学の上でも先輩だった筈庵高橋義雄氏。11月、文学雑誌「この花双紙」に短編『平相国』を発表。高山樗牛の同名のエッセイが書かれたのは、これより約十年後である。

---

• 明治28年（1895）22歳

9月、岩下清周氏、大阪支店長として赴任。

---

• 明治29年（1896）23歳

1月7日、庶務係となる。9月岩下氏、三井銀行を辞任し、北浜銀行設立を企画。後任として上柳清助氏が支店長となり、次長に池田成彬氏赴任。12月9日、預金係となる。日清戦争の好景気反動の時期で金融逼迫し、小恐慌的波瀾が大阪支店にも及んだ。この年、阪鶴鉄道、神崎（現在、尼崎）一塚塚間開通（明治32年7月、福知山まで全線開通）。

---

• 明治32年（1899）26歳

2月、平賀敏氏、大阪支店長として名古屋を去る。8月、大阪支店に勤務。貸付係長。この年、大阪支店「業務週報」を発行。

---

• 明治33年 (1900) 27歳

この頃、住友銀行副支配人に推選されたが成立せず終った。10月、丹沢コウ女と結婚。12月、東京箱崎倉庫主任に栄転の内示があった。

---

• 明治34年 (1901) 28歳

1月、単身東上。箱崎倉庫主任の辞令は一夜にして変更され、次席となる。6月30日、長男 富佐雄氏出生。

---

• 明治36年 (1903) 30歳

5月7日、長女とめ嬢出生。

---

• 明治37年 (1904) 31歳

11月18日、二男辰郎氏出生。12月池田成彬氏、三井銀行本店営業部長となる。10日、三井呉服店は株式会社三越呉服店となる。

---

• 明治38年 (1905) 32歳

この頃、三井物産及び三越呉服店より好条件で勧誘されたが、結局、不成立に終る。この時、三越入社準備として三越の株を買った為、多少の財を持つことになった。

---

• 明治39年 (1906) 33歳

1月15日、箕面有馬電気鉄道（後に軌道）株式会社創立発起人会設立される。4月28日、大阪一箕面一有馬間、宝塚一西宮間電気軌道敷設を申請する。この年、三井物産の重役飯田義一氏並に北浜銀行頭取岩下清周氏より、島徳蔵氏の株式仲買店を買収して株式会社となし、その支配人となるよう懇望される。

---

• 明治40年 (1907) 34歳

1月23日、三井銀行を退職。退職金四、八七五円。新設の証券会社の支配人となるため、一家を挙げて来阪する。しかるに、到着のその日より日露戦後の好景気の反動暴落が始まり、証券会社設立は不可能となった。天王寺烏ヶ辻の藤井別荘の一軒を借り、同じ園内の本屋には平賀敏氏一家が住まう。

4月、三井物産常務飯田義一氏の推選により、阪鶴鉄道監査役となる。

6月30日、箕面有馬電気軌道株式会社創立の追加発起人となる。8月1日、阪鶴鉄道は国有となり、監査役を辞任。10月19日、大阪商業会議所に於て箕面有馬電気軌道株式会社の創立総会を開催、専務取締役役に就任。

---

•明治41年（1908）35歳

10月1日、箕面有馬電気軌道株式会社の電灯電力供給事業認可を申請する。19日、岩下清周氏、同社社長に就任。22日、大阪一池田間及び箕面支線並びに池田一宝塚間工事施行認可される。この月、「最も有望なる電車」という宣伝パンフレット発行。日本最初のPR冊子である。11月、大阪・東京・京都各株式取引所に於て、同社株式定期売買取引を開始する。

---

•明治42年（1909）36歳

3月3日、箕面有馬電車支線、梅田一野江間（野江線）軌道敷設の件特許される。30日、沿線住宅地経営のため、池田に用地27000坪を買収。8月14日、野江線敷設に関し、大阪市と契約を締結。18日、三男米三氏出生。

---

•明治43年（1910）37歳

3月4日、電灯電力供給事業の経営許可される。10日、宝塚線・箕面支線営業開始。13日、池田車庫にて開業祝賀式を挙げる。7月1日、日本では初めての社債200万円（第一回、無記名利札付）を発行。現物問屋、黒川・竹原、特に野村商店の努力により売切れる。11月1日、箕面動物園を開く。

---

•明治44年（1911）38歳

3月30日、二女春子嬢出生。5月1日、宝塚新温泉の営業開始。6月15日、桜井住宅地（55000坪）の売出しを始める。10月6日、箕面動物園に於て山林子供博覧会を開催（電車の誘客を目的とするこの種の催しとして日本最初）。

---

•明治45年（1912）39歳

2月28日、宝塚一有馬間及び宝塚一西宮間の軌道敷設工事施行認可される。7月1日、宝塚新温泉内に新館パラダイスを開設。

---

•大正2年（1913）40歳

2月20日、十三一門戸間電気軌道延長敷設の件認可される。3月23日、宝塚新温泉に於て婦人博覧会を開催。5月1日、豊中運動場完成（大正4-5年、大阪朝日主催第一二回全国中等学校優勝野球大会を開催）。

7月1日、宝塚唱歌隊（後に少女歌劇、更に歌劇団と改称する）を組織する。

---

•大正3年（1914）41歳

4月1日、宝塚新温泉パラダイス劇場に於て、宝塚少女歌劇第一回公演を開く。この頃、大

阪日日新聞に岩下清周氏攻撃の記事が掲載され始め、これが所謂、北浜銀行事件に発展、岩下氏は6月、頭取を辞任、8月19日、遂に北浜銀行は支払い停止となる。唯一の取引銀行を失って資金難に当面し、第一次世界戦争の好景気が訪れるまで、苦難の連続となる。8月20日、豊中住宅地(五万坪)売出しを開始。10月1日、宝塚少女歌劇秋季公演開始、自作の歌劇『紅葉狩』を上演する。

---

•大正4年(1915)42歳

1月11日、岩下清周氏、箕面有馬電軌社長を辞任し、平賀敏氏、社長に就任。12月、小説『曾根崎艶話』出版。その後、発禁となる。

---

•大正5年(1916)43歳

3月31日、箕面動物園廃止する。4月28日、箕面有馬電軌の臨時株式総会に於て、灘循環線の特許譲受の契約書を承認。6月16日、灘循環線特許譲受に関する株主総会承認無効の訴訟提起せらる(原告である株主二名は阪神電鉄今西社長の関係者で、神戸線敷設の妨害策として、この訴訟が起こされた。第一—第二審、及び大正7年12月5日の大審院判決により勝訴となる)。9月15日、箕面有馬電鉄は岸本汽船より300万円の借入れに成功。10月1日、箕面有馬電軌専務取締役役に復帰。10日、阪神直通線の工事開始。

---

•大正6年(1917)44歳

2月23日、灘循環線特許譲受、認可される。5月26日、野江線敷設廃止の件、認可される(北浜銀行の破綻により、建設費調達が困難となり、放棄せざるを得なくなった)。6月東洋製罐株式会社の創立と共に同社の相談役に就任。8月9日、灘循環線工事施行の件、認可される。10月、『歌劇十曲』を出版、自作宝塚少女歌劇の脚本を取録したもの。12月、朝日新聞社長村山龍平氏、住友総本店総理事鈴木馬左也氏、鐘紡社長武藤山治氏など旧住吉村の別荘地帯の住人から、神戸線予定線について一部を地下鉄に変更させる運動が起こった。その結果、村山邸附近を迂回する路線に変更。

---

•大正7年(1918)45歳

2月4日、箕面有馬電気軌道株式会社を阪神急行電鉄株式会社と社名変更(略称、阪急電車)。5月23日、宝塚少女歌劇東京初公演(帝国劇場、30日まで)。30日、伊丹支線敷設工事施行許可される。10月1日、白米廉売資金として200円を池田町に寄付し、感謝状を受ける。12月、宝塚音楽歌劇学校創立認可され、校長に就任。

---

•大正8年(1919)46歳

3月17日、宝塚新温泉に歌劇新劇場竣工(箕面公会堂を移転改築したもので公会堂劇場と呼ぶ)。12月23日、神戸市内延長線軌道敷設特許(地下鉄)される。

---

•大正9年(1920)47歳

7月16日、神戸線本線(30.3杆)並びに伊丹支線開通営業開始。「新しく開通した神戸(又は大阪)ゆき急行電車、綺麗で、早うて、ガラアキで、眺めの素敵によい涼しい電車」という今も語り草になる新聞広告はこの時のものである。11月1日、大阪市角田町(梅田)に阪急ビルディング(旧館、五階建)竣工。5日、阪急ビル二階に食堂を開設。三一四一五階は事務所とし、一階は白木屋に貸して日用雑貨を販売させた。

---

•大正10(1921)48歳

3月1日、岡本住宅地(一万八千坪)の売り出しを開始する。7月20日、臨時株主総会に於て猪名川水力電気株式会社を阪急に合併することに決定。宝塚少女歌劇は二部制となり、第一部は公会堂劇場、第二部はパラダイス劇場で公演をすることとなる。10月より第一部・第二部を花組・月組と改称。9月2日、西宮北口―宝塚間(西宝線)単線にて営業を開始。12月31日、岸本汽船株式会社よりの借入金300万円を返済する。この頃、第一生命保険社長矢野恒太氏の依頼により東京の田園都市会社並びに荏原鉄道(後に日黒蒲田電鉄)の重役会に出席するようになる。

---

•大正11年(1922)49歳

1月、今津発電株式会社創立、監査役に就任。4月1日、西宝線複線開通する。6月15日、宝塚野球場竣工。28日、新京阪鉄道株式会社(現在の阪急京都線)創立総会開催。11月1日、新淀川神戸線鉄橋工事に着手。

---

•大正12年(1923)50歳

1月3日、宝塚新温泉は浴場を残して、劇場・パラダイス・食堂等全焼する。3月11日、甲東園住宅地(一万坪)売出し開始。8月15日、宝塚新温泉パラダイス及び洋食堂完成。

---

•大正13年(1924)51歳

2月6日、新淀川神戸線鉄橋竣工。25日、日本最初の職業野球団宝塚運動協会設立。6月12日、新淀川神戸線鉄橋開通。宝塚少女歌劇に新たに雪組を編成。7月19日、小林翁の抱懐していた大劇場主義を実現する4000人収容の宝塚大劇場が竣工した。月・花組合併柿茸落公演開始(9月2日まで)。7月25日、株式会社宝塚ルナパーク開業。10月、東京横浜電鉄株式会社監

査役に就任。25日、阪急電鉄は資本金を三千万に増資。12月27日、大阪市内高架線建設工事に着手。

---

•大正14年（1925）52歳

4月、『日本歌劇論』出版。5月2日、株式会社宝塚ホテル設立。6月1日、阪急ビルの二階と三階に直営マーケット開業。食堂は四階と五階で営業。日本最初のターミナルデパートである。9月10日、阪急電鉄社長平賀敏氏辞任。12月、目黒蒲田電鉄株式会社監査役に就任。

---

•大正15年（1926）53歳

昭和元年

1月、『続歌劇十曲』を出版。4月20日、宝塚国民座結成される。坪内士行・川口尚輝・堀正旗の演出陣に、森英治郎・出雲美樹子等の俳優が入団した。5月8日、中劇場に於てその第一回公演開始。7月5日、大阪市内高架線の運転を開始する。これにより大阪—宝塚間運転時分、45分を42分に、大阪—神戸間40分を35分に短縮。11月、第一生命保険相互会社の監査役に就任。12月18日、西宮—今津間開通し、西宝線を今津線と改称。

---

•昭和2年（1927）54歳

2月1日、株式会社宝塚植物園設立。3月10日、阪急電鉄取締役社長に就任。4月18日、台湾旅行に出発。7月28日、東京電燈株式会社取締役に就任。9月1日、宝塚大劇場の少女歌劇花組公演開始。日本最初のレビュー『モン・パリ』が上演され、斯界にセンセーションを起こした。11月17日、大阪市角田町（梅田）に阪急ビル（新館）第一期工事起工。

---

•昭和3年（1928）55歳

3月、東京電燈副社長に就任。4月、東電証券株式会社の取締役に就任。5月、目黒蒲田電鉄監査役を辞し、取締役に就任。10月22日、東電は東信電気会社と共同して、余剰電力の消化のため、昭和肥料株式会社を創立、その監査役に就任（同社は昭和14年、日本電工と合併して昭和電工となる）。

---

•昭和4年（1929）56歳

3月28日、梅田阪急ビル第一期工事竣工。4月15日、阪急百貨店開業、旧マーケットを発展的に解消。6月21日、阪急の神戸市内延長線地下式を高架式に変更の件許可される。7月10日、六甲山ホテル開業。8月28日、阪急自動車株式会社設立。

---

•昭和5年(1930)57歳

4月1日、大阪―神戸間に特急運転(所要時分30分)開始。6月28日、東京電燈社長若尾璋八氏辞任し、郷誠之助会長が社長を兼任。7月、東京電燈の経営合理化のため、人員整理を断行。9月19日、六甲登山架空索道株式会社(ロープウェイ)設立。10月、飯山鉄道株式会社取締役就任。11月24日、宝塚国民座を解散する。

---

•昭和6年(1931)58歳

2月2日、梅田阪急ビル第二期工事に着手。4月1日、東京電燈、東京発電を合併。25日、阪急電鉄資本金三千万円を四千五百万円に増資。7月1日、東京電燈と大同電力との係争問題に関し、池田成彬氏、木村清四郎氏の裁定下る。当時、財界は不況にあえぎ、電力会社は余剰電力の売り込みにしのぎを削り紛争が絶えなかった。11月1日、宝塚新温泉とルナパーク(動物園)・植物園との連絡橋完成し、新遊園地を開く。12月1日、梅田阪急ビル第二期工事竣工、百貨店売場・食堂を拡張する。引続き第三期工事と新乗降場の工事に着手。

---

•昭和7年(1932)59歳

1月1日、宝塚文芸図書館開館。4月19日、三井・三菱・興銀等の金融団の斡旋により、五大電力会社は協調機関「電力連盟」を結成。6月、『雅俗山荘漫筆』第一巻出版。8月、第二巻発行。12月、株式会社東京宝塚劇場創立、取締役社長に就任。10月19日、阪急電鉄創立25周年祝賀会を開催、『阪神急行電鉄二十五周年史』発行。11月20日、梅田阪急ビル第三期工事竣工。

---

•昭和8年(1933)60歳

1月、『雅俗山荘漫筆』第三巻を出版。4月20日、宝塚歌劇二十年記念祭開催。8月2日、阪急電鉄の神戸市高架乗り入れ漸く神戸市会の承認を受ける。9月『雅俗山荘漫筆』第四巻、『奈良のはたごや』の二冊を出版。11月25日、郷誠之助氏、東京電燈株式会社社長を辞任し、会長のみとなり、代わって社長に就任。

---

•昭和9年(1934)61歳

1月1日、東京宝塚劇場竣工、宝塚少女歌劇月組により柿茸落公演(31日まで)。1月8日、阪急電鉄社長を辞任し会長に就任(社長は空席とし、副社長に上田寧氏、専務取締役佐藤博夫氏就任)。この月、東宝劇団結成に乗り出す。2月1日、日比谷映画劇場を開場、入場料50銭均一の外画上映館として一新紀元を劃す。9月、東京高速鉄道株式会社監査役に就任。10月1日、池上電鉄は東横電鉄と合併につき取締役を退任。

---

• 昭和10年 (1935) 62歳

1月25日、午前6時宝塚大劇場より出火全焼。直ちに4月までに復旧の方針を発表し、竹中工務店に工事を注文する。3月3日、日本劇場を東宝経営とする。6月、内閣調査局参与を仰せつけられる。朝鮮電力株式会社取締役役に就任。7日、有楽座開場、東宝劇団により柿茸落公演 (30日まで)。有楽座開場之际、配布された『未来の劇団』なるパンフレット中の一節が花柳界の怒りを買ひ、料理組合・待合組合により東宝不観同盟を結成。その後、警視総監の仲介で円満に解決した。8月28日、東宝、日本劇場を合併。9月12日、浅間丸にて横浜を出帆、欧米視察の旅につく。(9月25日、サンフランシスコ着。29日、ロスアンゼルス着、その後、ニューヨーク・ロンドン・ベルリンを経てモスクワ・レニングラードなどソ連国内を旅行。12月、ライン河沿いに中欧をたずね、スイス・オーストリア・ハンガリー・チェコスロバキアを歴遊し、12月30日、ベルリンに帰る。11年1月22日、ロンドンに來り、2月上旬、パリー。5日パリーを去ってイタリアを訪う。3月13日、マルセーユ発、榛名丸で帰国の途につく)。9月、『私の行き方』を出版。アメリカより電報にて、職業野球団編成と新球場建設を指令する。

---

• 昭和11年 (1936) 63歳

1月23日、阪急職業野球団結成。2月26日、梅田阪急ビル第四期工事完成。4月1日、阪急電車神戸市内高架線竣工、終点は神戸三宮となる。4月17日、榛名丸にて欧米の旅より帰朝。9月、池田市五月山山麓に自邸雅俗山荘成る。

---

## おわりに

小林一三の記念館について様々な角度から考察してきたが、おわりにあたり逸翁自身は記念館、即ち雅俗山荘の事をどの様に考えていたのか。これについては、次の様な独白がある。

### 雅俗山荘の夢

東京電灯の整理、目黒、蒲田とか東横の電車の整理だとかいろいろ仕事をして来た。そして東京電灯も整理が出来た。そこでもう六十三になっていたし、外国へ行ってみよう、初めて世界漫遊をしようというので海外を廻った。それがすんで帰って来たら、自分はもう第一線を全部退こう。その頃のことだから、東京電灯を退いても相当の金をもらえる。少なくとも食うには困らんからというので『雅俗山荘』というのを作った。それは昭和十年に出来たのだ。そういうものを作ってそこで文化的生活をしようと思った。そこで昭和十一年にアメリカから帰って来て阪急、東電など関係会社を全部辞退して、いわゆる財界人の稼業をやめた。そ



### 小林一三記念館についての一考察

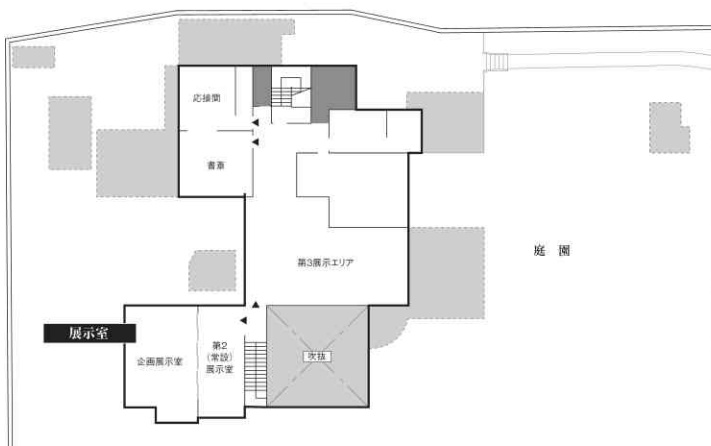
の当時の僕のやめるといった手紙がどこかにある筈だが、ほんとに全部やめてしまった。貰うべき慰労金は全部もらって、サッパリした気持で雅俗山荘に立てこもって、文化会館という<sup>15)</sup>ようなものの経営をやろうと思っていた。

雅俗山荘で文化会館のような文化事業の経営をしようと考えていたという。結局、その夢は逸翁美術館として実現された。さらにその後、本格的な新美術館が建設され、雅俗山荘と別称されていた旧逸翁美術館は、小林一三記念館として開館することとなった。そして、逸翁の生涯を偲ぶ謂わば文化会館の役を果たすこととなった。

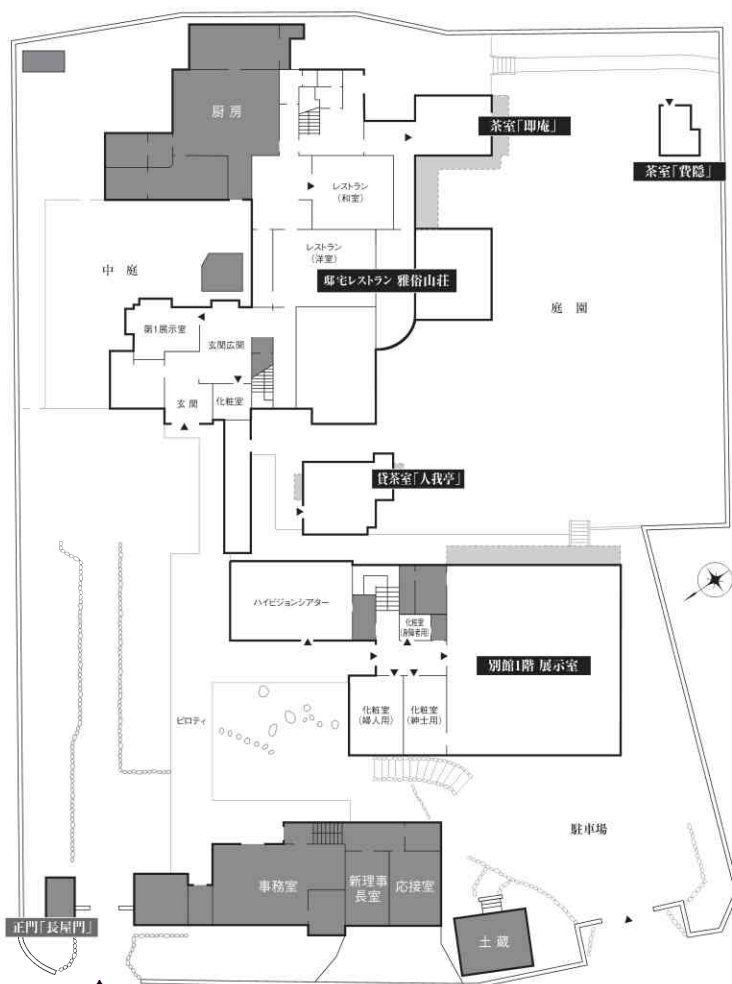
今日、小林一三の予言のとおり、池田市のこの一帯は、逸翁美術館、小林一三記念館、池田文庫などによるいわば阪急文化ゾーンを形成している。そして、その流れは、国内のみならず海外へと公益文化事業の発展の姿を予見させる勢いである。小林一三の生涯から、わたしは、人間の可能性について多くの示唆や考えるヒントを教えられたと思う。

〈小林一三記念館図面〉

2 階



1 階





雅俗山荘



1階広間 (吹き抜け、2階への階段)



雅俗山荘内展示



茶室「即庵」

小林一三記念館についての一考察



記念館全景（庭）



玄関ロビー



雅俗山荘内展示（書齋）



シアタールーム



「白梅館」展示場



「白梅館」展示室内



「白梅館」展示室内



「白梅館」大ジオラマ



「白梅館」展示室内



レストラン雅俗山荘サンプールーム



茶室「費隠」



「堀」





正門「長屋門」

写真は公益財団法人 阪急文化財団提供

雅俗山荘、長屋門、塀、茶室「費隠」、茶室「即庵」は、国登録有形文化財。長屋門は、東能勢村の庄屋・宇津呂家から移築したもの。「費隠」は、京都のさる寺から移築され、近衛文磨により命名された。「即庵」は、椅子に腰かけて喫茶する新方式の茶室で、畠山一清（畠山記念館創始者）の自筆刻書（即庵）の扁額が掛けてある。塀は、雅俗山荘と同様のスペイン瓦を載せた鉄筋コンクリート塀で、建物と庭のデザインの統一を図っている。（公式ブックレットより抜粋）

#### 注と参考文献

- 1) 『雅俗三昧』 著者 小林一三、発行所 雅俗山荘、昭和二十一年十二月廿五日発行
- 2) 『雅俗三昧』 p.1～p.2、著者小林一三、発行所 雅俗山荘、昭和二十一年十二月廿五日発行
- 3) 『逸翁美術館50年の歩み』、p.2 「ごあいさつ」 執筆小林公平、財団法人 逸翁美術館、2008年3月31日発行
- 4) 『逸翁美術館50年の歩み』、p.40～p.42、「展示活動の記録」 財団法人 逸翁美術館、2008年3月31日発行
- 5) 『逸翁美術館50年の歩み』、p.139、「展示活動の記録」、財団法人 逸翁美術館、2008年3月31日発行
- 6) 『小林一三コレクション 逸翁美術館』 インフォメーション、財団法人 阪急文化財団
- 7) 『小林一三記念館 公式ブックレット』、p.1 「小林一三記念館」、財団法人 逸翁美術館、2011年2月20日発行
- 8) 『新・逸翁美術館 開館記念特別展 茶人逸翁一茶の湯文化と小林一三』（茶道雑誌）、p.21、逸翁美術館学芸部、2009年10月発行

10月4日（日）から11月29日（日）まで新・逸翁美術館開館記念特別展が開催されたが、その展示会の構成と解説を逸翁美術館学芸部が次の様に述べている。文中、「池田美術館」とあるが現在の逸翁美術館の事を指す。

逸翁美術館は、小林一三（逸翁はその雅号）が没した年である昭和三十二年（一九五七）の秋に開館しました。「雅俗山荘」と逸翁が自ら名付けた自邸を、その没後展示ケースなどをつけ加えて急ごしらえの美術館とし、洋風と和風を折衷し、随所に逸翁の創意工夫が施された施設である「雅俗山荘」での美術展示は特色あるものとして親しまれてきました。開館より五十周年を機に新美術館の建設に着手しました。逸翁は「一都市一美術館」を主張し、収集した美術品

を公開することとしておりました。昭和十八年（一九四三）に制作された青写真が遺され、現在の新美術館の建設の土地に、「池田美術館」と名付けて、建設予定としていたのです。新美術館は、逸翁の思いをようやく実現したものと言えましょう。

- 9) 『小林一三記念館 公式ブックレット』、p.1 「小林一三記念館」、財団法人 逸翁美術館、2011年2月20日発行

この小林一三記念館の解説文の中に、雅俗山荘の説明がある。

設計は竹中工務店の小林利助で、昭和11（1936）年9月にほぼ完成したと見え、一三と家族は入居しています。最終的に竣工したのは昭和12（1937）年1月のことです。邸宅の構造は、美術工芸品の収蔵を考慮して、耐火構造のRC造り2階建てで、玄関壁面には黄色の竜山石が貼られています。2階壁面にはハーフトインバーの木製の柱、梁、斜材を露出させる構造を模し、玄関上部の壁面は四葉形のトレサリーで飾られており、瓦はスペイン瓦型式ながら和風の銀灰色の様相も呈しています。

内部は、玄関ホールに続く吹き抜けを持つ広間（2階への階段がある）、食堂の他に床柵書院のある8畳の座敷を持つなど、和・洋の接客の場とともに、所蔵美術品展示の場として巧みに用意されています。また、収蔵庫を邸内の2階に設けたのは独創的です。

- 10) 『逸翁鶏鳴集 日記抄・拾遺』、p.6～p.7、小林一三著、逸翁美術館、昭和38年1月25日発行

この3首は、「雅」の俳句。

- 11) 『逸山未定稿』、p.56～p.57、小林一三著、逸翁美術館、昭和38年1月25日発行

この2首は、「俗」の俳句、1首は和歌。俗というよりは稚気である。

- 12) 『小林一三全集』第三巻、p.428～p.430、(19) 利休問答、小林一三著、ダイヤモンド社、昭和37年1月20日初版発行

- 13) 『広辞苑』新村出編第五版、p.1115、「三夕の和歌」、岩波書店、1998年11月11日発行

「秋の夕暮」と結んだ三首の名歌、すなわち：

藤原定家の「見渡せば花ももみぢもなかりけり浦の<sup>とまの</sup>苦屋の秋の夕暮」

寂蓮の「さびしさはその色としもなかりけり<sup>まき</sup>横立つ山の秋の夕暮」

西行の「心なき身にもあはれは知られけり<sup>しぎ</sup>鳴立つ沢の秋の夕暮」

共に新古今集に所収、とある。

- 14) 『小林一三翁の追想』、p.596～p.597「お手紙に偲ぶ」加藤義一郎（逸翁美術館副館長）執筆、小林一三翁追想録編集委員会 佐藤博夫 編集兼発行者、昭和36年9月15日発行

- 15) 『私の行き方』、p.244、「雅俗山荘の夢」、小林一三著、阪急電鉄株式会社、昭和55年5月25日発行

追) 小林一三の年譜については、下記の文献を参考、引用した。適宜、塩田が原文の不必要と思われる箇所を削除した。

・『逸翁自叙伝—青春そして阪急を語る』、p.268～p.303、小林一三著、阪急電鉄株式会社 1979年7月20日初版発行

・『小林一三日記（三）』、p.743～p.771、小林一三年譜、阪急電鉄株式会社 1991年6月20日発行、文藝春秋製作

・『小林一三記念館公式ブックレット』、財団法人阪急学園 池田文庫制作・編集、財団法人逸翁美術館発行、笹徳印刷株式会社印刷・製本、2011年2月20日発行

◆本論執筆にあたり、逸翁美術館・小林一三記念館・池田文庫の学芸課長仙海義之先生に、多くの写真および資料等の紹介およびご教示を賜りましたことに対し厚く感謝の意を表します。